

<研究成果の紹介>

飼料イネ「クサホナミ」の収穫適期判断指標

農業研究部作物グループ

1. 成果の内容

成熟期前の稲をサイレージ化し、家畜飼料として利用する飼料イネ栽培は、畑作物による水田転作が難しい低湿田、中山間地等への新たな転作品目として期待されています。

安定した飼料イネ栽培を行うには、クサホナミ、はまさり等の専用品種を用い、多肥栽培を行うことが必要ですが、基本的な農作業は普通の稲作と変わりません。ただし、飼料イネの収穫時期は、一般稲作の成熟期よりもやや早い、黄熟期が適期とされています。黄熟期とは、「穂が黄化する時期」と定義されていますが、一穂粒数の多い飼料イネ専用品種では適期の判断が難しく、その時期を的確に判定する指標が必要です。そこで、飼料イネとして有望な専用品種「クサホナミ」を用いて、登熟時期別の収量、品質を明らかにし、収穫時期の判断となる指標を作成しました。

「クサホナミ」の収量が高まるのは、出穂後26日以降で、これより早く収穫すると、低収となります。さらに、良好なサイレージを得るためには、収穫物全体の水分が60%以下となることが望ましく、早刈りではサイレージ品質を低下させる原因と

なります。この2点から、クサホナミの収穫開始時期は出穂後26日頃と考えられました(図1)。

この時期の、稲の外観の特徴として、穂全体の黄化率が69%(上位枝梗籾の黄化率が89%)、籾水分36%、止め葉が緑色を保ち上位2葉が黄化を始める時期でした(図2)。

さらに、収穫適期であっても、茎葉に泥や水が付着するとサイレージ品質が低下することから(図1)、倒伏による土砂の混入や雨後の収穫を避けるよう留意する必要があります。

2. 技術の適用効果と適用範囲

飼料イネの収穫時期を的確に判断できることから、高品質・多収に繋がるだけでなく、作業面積の拡大が図れます。

3. 普及・利用上の問題点

品種が異なる場合や、クサホナミでも極端に籾ワラ比が異なる場合には、適用できない可能性があります。

これらの影響については、平成16年度に調査を予定しています。(神田幸英)

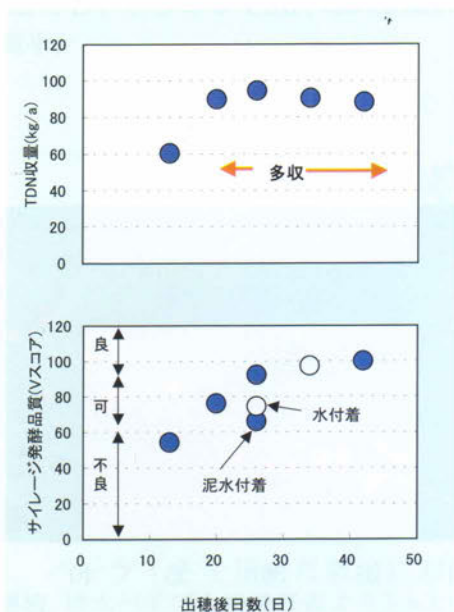


図1 サイレージ品質とTDN収量の推移

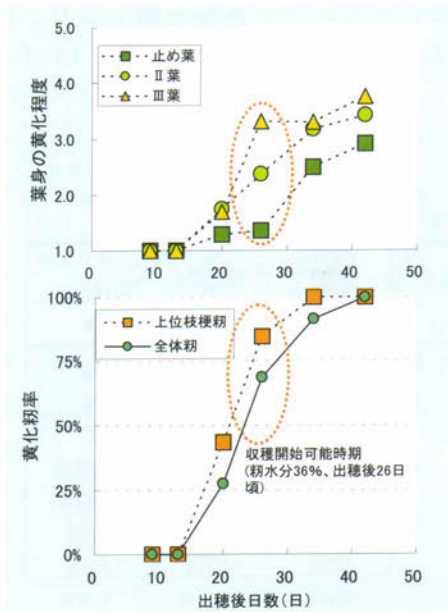


図2 出穂後の黄化割合と上位葉黄化の推移